ＴＯＴＯ出版「庭の旅」に登場する「私たちの人生を変えた庭」。山形の散居集落で出会った「今までに見た中で一番美しい庭」の見取り図。（白井温紀氏）

鎌倉Ｓ様邸、施主が鎌倉在来の町並みを望まれたので、竹穂垣、敷地にあった石、植栽などを駆使した前庭。（白井隆氏）

2001年に取り組んだ長野県小布施町北斎館の修景事業。町づくりの成功例として知られるこの町の、第二次町づくり修景計画にまで発展した。（白井隆氏）

「土地の神の声を聴け」が金科玉条

永田　昔は出入りの職人さんがその地の素材を使って、美しい街並みをつくっていました。先日伺った某造園会社の社長様のお話によるとたとえば大津坂本の石切職人・安太衆達は、全国的に有名な「安太積み」の築造技術を伝承しながら、行く先々の城の石垣造りにその土地土地の石を使ったのでした。おかげで、各地の城の石垣は独自の色を放ち、それぞれの街の景観となっていったんですね。我々がいま考えなくてはいけないのは、その地域に応じた商品を提案することです。現在、地域ごとに違った商品を出すという試みを一部でやっているんですが、このあたりが今後のチャレンジじゃないかと思います。

白井(温)　地域の違いというのはありますね。同じ黒でも、地域によって、ここではこの黒は強いのではないかとか、それで使えなかったり。

白井(隆)　私たちのデザインの金科玉条は「土地の神の声を聴け」ということなんです。歴史も伝統も工芸品も植栽も、なにもかも。それが住まいづくりの基本です。茶室の壁土などは、その土地に出たものを使います。その土地でしか手に入らない工業製品も、ものすごく魅力的ですね。

永田　工業製品と、ひとつひとつの個性を出すモノづくりの間には、ギャップもありますが、現実に工業製品でお客様が喜んでくださるという事実もある。ですから、将来にわたって高いレベルでの融合を模索していきたいですね。

2005年はどんな年に？

――最後に、2005年を迎え、いまお考えになっていることや抱負などをお聞かせください。

白井(温)　2004年は天災人災のニュースばかりで、庭の楽しみは国の平和あってこそと実感しました。自分だけの楽しみを追い求める前に、自分の住む地域に平穏無事に過ごせることのありがたみをかみしめたいですね。私自身その土地にお礼をするつもりで地域に役立つ庭づくりができるといいと思っています。そういう意味でも、長年その土地に合ったもの、その土地ならではの使い方、創意工夫をもう一度見直して、先人の知恵・生活文化に学びながら暮らしていきたいですね。「ああ、ここに帰ってきてよかった」と思えるような庭。それがこれからの本当の贅沢だと思いますから。

白井(隆)　もともと江戸時代の住まいづくりは、庭園の構想として計画されていて、そのなかに建家を落とし込むというものでした。それが戦後の60年ぐらいの間だけ、「近代」を消化吸収するために再構築が進み、その結果として混乱しているにすぎないと思うんです。でも、考え方の基本は江戸時代にあって、「庭園に暮らす」という意識だったんです。そして、40坪でも20坪でもそれは可能なんです。そんな庭園の構想を本来のかたちに、本来のデザインのあり方に、きちんと位置づけたいと思いますね。

永田　右肩上がりの市場がなくなっているなかで、産業がしっかり根付くためにも、外部空間を価値あるものにしていかなくてはなりません。家の中だけでなく、そろそろ外部空間の価値も見直され始めていると思いますので、力を合わせて新しい価値づくりや地方の創造のために、厳しい環境のなかでも将来性のある活動をしていきたいと思います。

今日は本当にありがとうございました。今後も、街並みを美しく住まうための働きかけや、エクステリアの重要性を高める為の先生方のご活躍を多いに期待しています。

対談後記

新しい住空間・街空間！ 本当の豊かさを求めて

ご承知のように、清水寺貫主（京都）は恒例として当年を表す漢字一文字を年末に書くのですが、昨年（2004年）の一文字は、墨跡が黒い涙のようにしたたりおちる「災」の一文字でした。確かに昨年は、史上希に見る猛烈な暴風雨が10度も襲来・上陸して全国各地に大災害をたらしましたし、新潟中越地震の発生は、人も、住居も、道路も、鉄道も、山も川も森もずたずたに切り裂きました。自然が、いや地球そのものが、牙をむいた!?そんな印象の一年でしたが、これは、人々が、これまであまりに安易に性急に「文明」を追い求めてきた「その代償」ではないでしょうか?「文明」は、本来「豊さ」をもたらすはずのものです。本当の「豊さ」とは、どういうものか?、いまこそ深く自問・自省しなければなりません。
いまみたいにスピードや効率、マスプロダクションが万能・優先ではなかったころ、人々は、ゆっくり時間をかけ、巧みに自然と共生・調和しながら、住まいをつくり、街を創ってきました。反面、高度成長期、各地に急激に拡大した「タウン」は、ひとつの「街」でありながら、その実状は、「建物・箱物」が雑多に込み合い、「街」としての景観はいまでは決して美しいものとはいえません。個々の庭や塀、エクステリアも不備なら、美しい街並みづくりへの配慮が施されたとは、とてもいえないのが実状です。将来的に人口が減るに伴い、こうした醜い街は終にはゴーストタウンとなりかねません。ですが、バラバラなイメージのこうした既存タウンでも、せめて道路際にでも、統一感のある色・リズム・連動性を創出すれば、その街並み価値はぐんと高まるでしょう。
街も豊か、心も豊か! そうなってこそ、優れた「土地ブランド」が生まれるのです。家づくり、街づくりのなかで、「本当の豊かさ」を求める!そこに、私たちの出番があり広い舞台があります。そこで、存分に、私たちエクステリア関係者は、本領を発揮しなければなりません。個々の住まいと暮らしの「外部空間」は勿論、さらには街全体の「外部空間」をも、より快適に! より美しく! する。そして、その空間が人と街のコミュニケーション空間であることを重視し、その啓蒙と具現化に努めなければなりません。それが、当代のニーズなのです。私たちは、そのニーズに応えて「庭」が本来的に持っている「住空間」としての役割と機能を重視し、それにもとづく様々な提案と最適な商品・商材を提供し、また、それらを広く普及・根付かせ、やがてそのソフト・ハードを共に産業としてしっかり確立していく覚悟です。そして常に現場からのフィードバックと遅滞ないレスポンスをいっそう心掛けて参ります。

本年、私たちは、このようなコンセプトにもとづいて各種の商材・商品作りに励む所存であります。来る4月、春の新商品展示会にご期待下さい。

いま、時代は本当の豊かさを求めています。
エクステリア業界の役割は非常に大きく、期待も大きい。
次代の住空間・街並み空間の担い手として、誇りある業界として地位を高めてまいりましょう。販売工務店様とともに、夢に向かって共に歩みましょう！
チャンスは多く！ 舞台は広い！

注：清水寺貫主（京都）は、あの「災」の一字を黒々と書き上げたあと、「転禍為福」と付説して、人々を励ましました。

**普遍性のある飽きのこないデザインで
お客様の心のひだに入ってくるようなものを
今後もつくり続けていきたいですね。**

永田 等（ながた・ひとし）

三協アルミニウム工業株式会社
エクステリア建材事業本部長